

振り付け・演出、湯浅より、公演直前コメント、その2 グランドダンス

振り付け秘話ならぬ、振り付け悲話？

企画者の E さんからこのお話を頂いたのは 2 月末、古い友人が突然逝去した、その訃報と完全に同じ時刻にメールが届きました。彼女に押されている気がしてすぐお引き受けしたのです。とは言え、最初は来年の 7 月かと思ったほど、性急な話です。

3 月 21 日の初ミーティングの後は新幹線移動中も耳にアーサー王を突っ込んで聴き続け、7～8 曲を振り付け、6 日後には殆どの曲を振り写しして、3 月中に大筋が出来ました。お一人で振り写しに臨んだ S さんの理解力と粘りには感謝しかありません。それからパッサカリアと最後のグランドダンスにじっくり取り組んだわけです。

パッサカリアについては、公演直前コメントその 1 で触れましたが、意外に手間取ったのがグランドダンス。イギリスの劇では、最後にジグと呼ばれる、出演者総出の楽しいダンスがお決まりで、これを実現したかったのです。出演者はダンサーとノン・ダンサー合わせて 10 名。10 名のダンスというのは、ゴージャス極まりない振り付け者には至福のダンスです。しかし、気を引き締めて計画し、全員が気分良く、見栄えよく踊れるダンスにしなくてははいけません。人数が多いほど、図形のバラエティは考えられるけど、図形間の移動をダンサーが上手く誘導する仕組みを考えなくてははいけません。もう殆ど数学の世界です、頭の中だけの！ 蓋を開けて、人体が動いてみたのが 5 月 28 日。なんと、出来るではありませんか！ 計画通り！！ す、すばらしい！！

お楽しみ下さいね、ダンス初挑戦の初々しいダンサーから熟練のダンサーまでが一つになって作る、最後の幸せなひと時を。 こんな危険に全員が挑戦し、でこぼこを均（なら）して行くのがいかにもイギリスらしい。イギリスの心意気も伝えられる公演になれば、振り付け者、最高の幸せです。